
空が作り出す物

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空が作り出す物

【Nコード】

N6340C

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

とある丘の上で出会う幼馴染の二人。彼は何故かそこで空を眺めているのが好きだった。彼女はその理由を問うと彼は言う、空はいろいろな物を作り出しているのだと

それは結構珍しいのではないのだろうか？

この世界に存在する物は多少の変化はするが、あまり激しくは変わらない。

岩・山・地面、地球の表面を構成する物は大きさが違うだけですべて鉱物だし、自然界に存在する物も成長はするが急激な変化はない。

だからなのか僕は誰も来ない小高い丘の上で寝転んで空を見るのが好きなかもしれない。

「あんたもよく飽きないわね」

僕は目線を少しだけ横にずらす。

おいしいもうちよつと、すこし顔をずらせば何とか……。

「ぐはあ」

いきなり顔面に蹴りを喰らった。

くそ、ばれたか。そんな短いスカートをはいてる方が悪いんじゃないか。

彼女は怒りながらも僕の横に座り今度はあきれた顔を向けてきた。

「つで、何してたの？　つてか聞くまでもないか」

「じゃあ聞くなよ」

「社交辞令よ」

どんな社交辞令だよ。それに僕がどこで何をしてようと勝手だろ、そう反論したいが力関係が下に位置する僕には彼女に文句を言えるはずもなく、しかたなく目線を元に戻す。

「そんなに面白い？　空ばかり見てて」

「まあね」

「何処が？」

今更それを聞くか？ それに君との付き合いも結構長いぞ。付き合いといっても恋人関係ではなく単なる腐れ縁だ。何故かは分からないが一緒にいることが多い、それは高校生になった今でも不思議と変わることなく続いている。だから周りから結構誤解させるが決してそういう関係ではない。

本当、何でだろ？

「聞いてるの？」

僕が無視したと思ったのか彼女は焦れた様子で聞いてきた。

なんかそんな態度で聞かれると急に意地悪したくなる。昔からそうだ、何故かは分からないがそんな気分になる。

「電波の受信状態が悪いんだ。つまり圏外」

彼女は頬を引きつらせ僕は笑みがこぼれる。

よっしゃー、ざまあみろ。

さぞかし悔しがっている彼女を見ようと僕は目を向ける。そして一気に青ざめる……僕が。

彼女はよほど頭に來たのか頬を引きつらせるところか目が血走っている。

もし僕に怒りのマークが見えるなら十個以上は見えるだろう。というか黒いオーラが見えてる！

「確か電波って叩けば直るよね」

「いや、それはテレビだから！」

「大丈夫、同じ電化製品でしょ」

「根本的に違うから、用途も製造方法も違うから」

「問答……無用」

そして始まる惨劇。

わあ、なんか過去の光景が蘇ってくる。そう彼女にボコボコにされる光景が何度も……って、そんな過去しかないの？

自分の走馬灯にツッコミを入れながら僕は意識を失っていった。

「それで、何でそんなに空が好きなの？」

惨劇の後、奇跡的に一命を取り留めた僕に向かって彼女は改めて聞いてきた。

まあ、再びあの惨劇を繰り返すつもりはないから真面目に答えるか。

「空って結構変わるから」

「はあ？」

「なんつうかな、地球上で変化が激しい物ってあまり無いだろ」

「そう？ よくテレビで一気に景色が変わる物があるよ。それが幻想的で綺麗になったりとか、よくあるでしょ？」

「でもそういうのは全部空が関係してると思うんだ。たとえば夕刻とか日の傾きとか、全部空に有る物が関係してるだろ？」

「そう言われると、そうかも？」

「それに夜景だって空が暗くならないと見れないだろ。空って言うのは上にあるだけじゃない、いろいろな物を作り出してると思うんだ。だから見てると空が作り出す変化が結構面白いんだよ」

「ふん」

うわっ、興味なさそう。けどしょうがないか、僕も自分の事を空ばかり見てて変な奴だと思ふときがあるからな。だけどこれだけは他人には分からない自分だけの楽しみだと思ってる。だから彼女が分からなくても別に構わないんだけどね。

けどこれだけは言っておかないと

「僕は空を見てるのが好きなんじゃない、空が作り出す物を見てるのが好きなんだ」

「その割にはいつもここにいるじゃない？」

「季節や気温によって結構違うんだ」

「あっそ」

なんだろう、なにか沸々と殺意が……。

まあいいや、僕は青に赤が混じり始める空に目を戻した。

少し濁っている。晴れている割には見通しが悪い、それだけ空気中の不純物が多いのだろう。けどこれはこれで味がある。

ワビサビというのだろうか、そこまで気取るつもりはないがそんな感じがする。だから自分が評論家だとか鑑定士だとも思わない。けど空は最高の芸術家だとは思ってる。

（後書き）

初投稿になります、そして始めまして葵夢幻と申します。これは以前別のサイトに投稿しよとした物ですが、何の因果か投稿できずこのサイトに投稿させていただきました。

私自身小説を書き始めてからあまり時間が経っていないので、いろいろな意見を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6340c/>

空が作り出す物

2010年10月11日00時58分発行